

産卵期におけるイワナ三倍体、二倍体の可食部の比較

新海孝昌・近藤博文

目的 イワナ全雌三倍体普及の資料とするため、産卵期における可食部割合を同二倍体と比較した。

方法 飼育期間は平成25年7月16日～11月5日とし、供試魚にはイワナ三倍体雌28尾(雌雄混合群雌 平均体重 1.48kg)と同二倍体雌(雌雄混合群雌 平均体重 0.76kg)を用いた。飼料はますネッカ色揚げ8EP(科学飼料研究所)を使用した。1日の給餌量はライトリッツの給餌率表より算出し、1週間ごとに増重量を推定して補正した。1日1回ないし2回、手撒きで行い、飽食した場合は残量を計測した。月に1度、各群から2尾ずつ取り上げて三枚におろし、二枚のフィレの腹鱗を除去した。可食部の重量を計測して、体重に対する割合を算出した。

結果 7月の開始直後では、イワナ三倍体雌、二倍体雌の可食部割合の平均はそれぞれ、65.8%、64.4%であ

った。9月には三倍体雌が65.8%、二倍体雌が60.4%となり、三倍体雌の増減はなかったが、二倍体雌は4.0%の減少が確認された。10月には三倍体雌が63.3%、二倍体雌が52.3%となり、三倍体雌が2.5%、二倍体雌が8.1%減少した。終了時の11月には、三倍体雌の計測は1尾のみとなった。可食部割合はそれぞれ、64.8%、46.7%となり、三倍体雌が1.3%、二倍体雌が5.6%減少した(図)。

イワナ三倍体雌の可食部割合は7月から11月にかけて65%程度で推移し、大きな増減は見られなかった($df=5, r=0.35, n.s.$)。一方、二倍体雌では7月の平均64%が、11月には47%となり、有意な減少が認められた($df=6, r=0.93, p<0.01$)。イワナは三倍体化することで、可食部減少を軽減させることが可能である。

(増殖部)

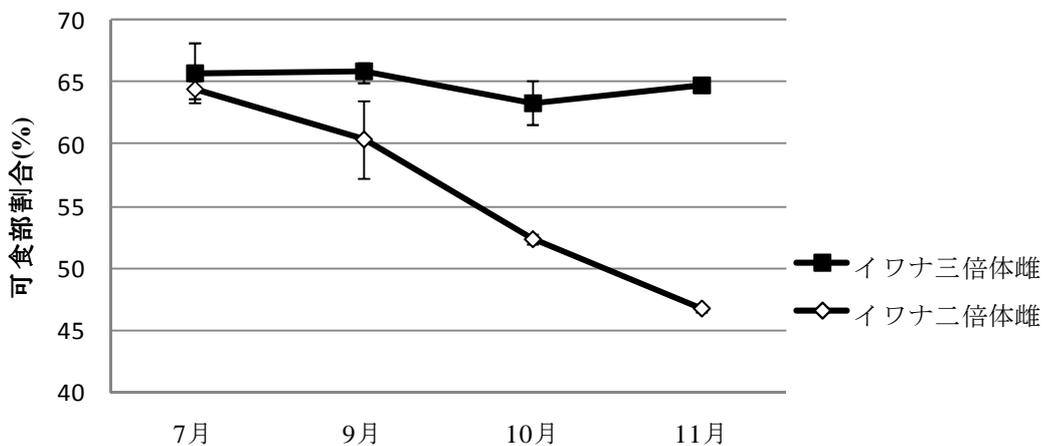


図 体重に対する可食部割合の平均(平均値±誤差範囲)